

日本のオリーブ史

日本にオリーブオイルが上陸したのは意外に古く、約400年前の安土・桃山時代。キリスト教布教のために来日した宣教師が持ちこんだ、という記録があります。

はじめてオリーブの木が植えられたのは、時が過ぎて1879（明治12）年のこと。フランスからオリーブの苗木2000本を導入し、その結果、「神戸オリーブ園」で日本ではじめてオリーブの実がなりました。このとき、実をしぼってオリーブオイルもつくられています。しかし、神戸ではよく育ちませんでした。

1908（明治41）年、当時の農商務省は、魚介類の缶詰に使うオリーブオイルの自給を目的として、香川、三重、鹿児島の3県で栽培を開始。このうち、香川県の小豆島しょうどしまにようやく根づきました。現在、小豆島は「オリーブの島」として有名です。

明治以降、オリーブオイルは缶詰のオイルとしてだけでなく、椿油つばきあぶらのような頭髮油としても使われ、昭和30年ごろには化粧用オリーブオイルのブームもありました。

1985（昭和60）年以降は食用の輸入オリーブオイルが増加し始め、イタリア料理のブームや定着などもあって、現在では輸入量が年間6000トンを突破しています。